

英語語法文法学会

第 23 回大会資料

日 時： 2015 年 10 月 24 日（土）

開催校： 龍谷大学 深草学舎

住所： 〒612-8577 京都市伏見区深草塚本町67
<http://www.ryukoku.ac.jp/>

順路：京阪本線「深草」駅下車、西へ徒歩約 5 分。京都市営地下鉄烏丸線「くいな橋」駅下車、東へ徒歩約 10 分。JR 奈良線「稻荷」駅下車、南西へ徒歩約 15 分。

●大阪駅からは

JR 京都線（東海道線）新快速で京都駅へ約 30 分、乗り換えて、京都市営地下鉄烏丸線でくいな橋駅へ約 5 分、あるいは、JR 奈良線で稲荷駅へ約 6 分。JR 環状線で京橋へ約 6 分、京阪本線に乗り換えて特急で丹波橋へ 35 分、準急あるいは普通に乗り換えて深草へ 6 分。

●京都駅からは

京都市営地下鉄烏丸線でくいな橋駅へ約 5 分。または、JR 奈良線で稲荷駅へ約 6 分。あるいは、JR 奈良線にて約 2 分で東福寺駅、同駅にて京阪本線に乗り換えて深草駅へ約 4 分。

英語語法文法学会

The Society of English Grammar & Usage

September 2015

英語語法文法学会

第 23 回大会プログラム

大会参加費：学会会員 1,000 円／当日会員 一般 2,500 円 学生 2,000 円（予稿集代を含む）

日 時：2015 年 10 月 24 日（土）

＜学内の食堂が利用可能です。学舎周辺にも各種お店があります。＞

開催校：龍谷大学 深草学舎

住所：〒612-8577 京都市伏見区深草塚本町 67

<http://www.ryukoku.ac.jp/>

順路：京阪本線「深草」駅下車、西へ徒歩約 5 分。京都市営地下鉄烏丸線「くいな橋」駅下車、東へ徒歩約 10 分。JR 奈良線「稻荷」駅下車、南西へ徒歩約 15 分。

●大阪駅からは

JR 京都線（東海道線）新快速で京都駅へ約 30 分、乗り換えて、京都市営地下鉄烏丸線でくいな橋駅へ約 5 分、あるいは、JR 奈良線で稲荷駅へ約 6 分。JR 環状線で京橋へ約 6 分、京阪本線に乗り換えて特急で丹波橋へ 35 分、準急あるいは普通に乗り換えて深草へ 6 分。

●京都駅からは

京都市営地下鉄烏丸線でくいな橋駅へ約 5 分。または、JR 奈良線で稲荷駅へ約 6 分。あるいは、JR 奈良線にて約 2 分で東福寺駅、同駅にて京阪本線に乗り換えて深草駅へ約 4 分。

開催校委員：前川貴史、五十嵐海理

- ワークショップ（22 号館 102） ●研究発表（22 号館 102、103） ●総会（22 号館 101）
- シンポジウム（22 号館 101） ●一般休憩室・書籍展示（22 号館 104）
- 司会者・関係者（ワークショップ・研究発表・シンポジウム発表者）控室（22 号館 106）
- 大会本部・運営委員会室（22 号館 105） ●アルバイト控室（22 号館 B101）

受付：10 時 00 分より 22 号館 1 階入口

ワークショップ（22 号館 102） 10.30 – 11.38

司会 西田光一（下関市立大学）

1. 「英語の不変化詞の直示的機能について」 大谷直輝（東京外国語大学）
2. 「John ate the meat naked. 再考」 吉川裕介・大野真機（昭和大学）
3. 「existential *may* の用法について」 明日誠一（青山学院大学非常勤）
4. 「He built his house 型表現の意味構造と成立条件」 金子輝美（元愛知淑徳大学非常勤）

受付：12時30分より 22号館1階入口

研究発表 13.00 – 14.45

第1室 (22号館 102)

司 会 家口美智子 (摂南大学)

1. 13:00-13:35 「起動動詞 begin, start に後続する to 不定詞と動名詞の
選択基準」 藏菌和也 (関西学院大学大学院)
2. 13:35-14:10 「条件文の帰結節における be going to をめぐって
—意味論と語用論の観点から—」 佐藤健児 (日本大学)
3. 14:10-14:45 「述語削除と法助動詞の陳述緩和的・根源的意味」
木村宣美 (弘前大学)

第2室 (22号館 103)

司 会 今野弘章 (奈良女子大学)

1. 13:00-13:35 「英語の動詞が形容詞化する場合の否定性と婉曲性
—touchy の意味解釈—」 有光奈美 (東洋大学)
2. 13:35-14:10 「動詞 walk が場所句・経路句を伴わないのはどのような場合
なのか」 出水孝典 (神戸学院大学)
3. 14:10-14:45 「英語における名詞のいわゆる「同格」節について」
濱松純司 (専修大学)

総会 (22号館 101) 15.00 – 15.20

開会の辞	会 長	内 田 聖 二	(奈良大学)
開催校代表挨拶		福 本 宰 之	(龍谷大学文学部教授)
学会賞・奨励賞選考報告	会 長	内 田 聖 二	(奈良大学)
事務局報告	事務局長	五十嵐海理	(龍谷大学)

シンポジウム (22号館 101) 15.35 – 17.45

テーマ 「副詞を巡る諸問題：語法文法、辞書記述、談話、文体」

司 会 滝沢直宏 (立命館大学)

1. 「ly 副詞にみる副詞の多様性：語法・文法・パターン」 滝沢直宏 (立命館大学)
2. 「語法研究の要一副詞—コーパスを活用した辞書編集の立場から—」
井上永幸 (広島大学)
3. 「副詞 (類) actually, really, indeed, in fact の考察」 都築雅子 (中京大学)
4. 「小説における副詞研究の多様性」 堀 正 広 (熊本学園大学)

閉会の辞 前川 貴史 (龍谷大学)

懇親会 18.00 – 19.30 会場：ホール1 (22号館 生協食堂)

(懇親会費：一般 5,000 円 学生 3,000 円)

ワークショップ (22 号館 102) 10.30 – 11.38

司会 西田光一 (下関市立大学)

英語の不変化詞の直示的機能について

大谷直輝 (東京外国語大学)

本発表では、前置詞の副詞的用法 (以後、不変化詞) が持つ直示的機能の記述と分析を行う。不変化詞は文法的な補語句をとらないが、*The table was so dirty, so I wiped the dirt off.* のように補語句の内容 (*the table*) を文脈から補える場合も多い。一方、不変化詞には、話者が位置する発話の場に関する情報を含意する直示的機能が存在する。例えば、*The stars are out now.* では、*out* によって *the stars* の「発話の場への出現」が、*My vacation is two days away.* では、*away* によって「発話時から見た未来」が表される。

本発表では、4 種類の辞典を用いて、*BNC* での頻度が高い 20 の不変化詞の直示的機能を、空間的・時間的・社会的・談話的・その他に分類して考察を行った。その結果、空間的な直示的機能は他の直示的機能に比べて広範に見られる点と、「話し手の普段の状態」からの相対的な関係を表す用法が広く存在する点が確認された (*I feel a bit off. / Long skirts are {in/out} now.* など)。「話し手・発話時・発話現場」以外に、「話し手の地位」や「発話自体」も発話の中心となるならば、「話し手の普段の状態」も発話の中心とみなせるため、直示的機能は不変化詞に広く定着した用法と言える。

John ate the meat naked. 再考

吉川裕介 (昭和大学)・大野真機 (昭和大学)

本発表では、主語指向の二次述語の例として、これまで多くの論文で取り上げられた(1)のような例を取り上げる。興味深いことに、描写述語の指向性は語彙に指定される意味の合成性のみによって決定されるのではなく、文脈に依存することも多い。これに従い、描写述語 *naked* が *John* を描写する解釈と *the meat* を修飾する解釈との曖昧性がある点を明らかにする。

(1) *John ate the meat naked.*

(Aarts 1992: 51)

本発表では、描写述語の *naked* の新たな意味の獲得について、実例に基づき記述する。具体的には、(2)が示すように目的語指向の *naked* の用例が散見され、形容詞 *naked* は意味の拡張によって「ある特定の食べ物」を修飾することが可能となってきた点を指摘する。次に、実例から採取した用例を基に、*naked* の意味について他の類義語と比較しながら具体的に論じ、新たに獲得した意味について考察を深めていく。

(2) *We like the steak naked, but if you want to dress it up then go for the wasabi butter and ethnic butter.*

(Google)

existential *may* の用法について

明日誠一（青山学院大学非常勤）

法助動詞の *may* は、*sometimes* (または *some*) の意味で解釈できる場合がある。この用法を Palmer (2013) に倣って「存在モダリティ」と呼ぶことにする。(1) はその例である。

(1) Or the pollen may be taken from the stamens of one rose and transferred to the stigma of another. (Palmer 2013:108)

((1) は、Coates (1995:62) では *merger* の例として扱われている。)

存在モダリティの用法を最初に指摘した Huddleston et al (1968) にも言及しながら、この用法が「話し手が場合分けを想定している」とことと関係することを指摘する。(2a) と (2b) は、問題の用法が場合分けと関係することを示唆する例で、順に Quirk et al (1985) と Huddleston and Pullum (2002) の 地の文 からの引用である。

(2) a. There are ten boys and girls in the playgroup.

In the last example, *ten* may or may not include *boys and girls* in its scope.

b. In informal style *and* may be interpreted as “while”:

[30] i *He came in and I was still asleep.*

ii *Did he come in and I was still asleep?*

He built his house 型表現の意味構造と成立条件

金子輝美（元愛知淑徳大学非常勤）

間接使役表現（介在性表現）*He built his house* は単文形式であるが、(1)「彼は業者に家の建築を発注した」、(2)「大工さんが建築作業をした」、(3)「彼は家を建てた」という複合的意味構造を内包している。(1)+(2)から、(3)という結果が得られる。(2)→(3)という意味関係を他の日本語表現で確認する。

- ・行員が私の口座を開く作業をした→私は銀行口座を開いた
- ・医師団が私の癌の手術をした→私は癌の手術をした
- ・出版社職員が彼の雑誌論文の編集作業をした→彼は雑誌に論文を載せた

現場の具体的行為が拡大解釈され、若干抽象化されて、1つの総合的出来事として社会性を帯びる。現場の人物と行為は情報価値が低いので無視され、使役者（文法的主語）に話者の焦点が移される。この種の英語表現を成立させるものに、言語外と言語内の要素がある。日英語間で容認度に違いが生じるのは、主に両言語の統語的制約に起因する。言語外の要素は日英語においてはほぼパラレルである。この種の英語表現の個々の特徴を羅列しただけでは、包括的な成立条件を求めたことにはならない。実例から共通点を抽出し、成立条件を平易な言葉で記述すると、「言語外の要素によって、実際の行為者（被使役者）が脱焦点化され、文法的主語の領域に取り込まれる」となる。

司会 家口美智子 (摂南大学)

起動動詞 *begin*, *start* に後続する *to* 不定詞と動名詞の選択基準

藏園和也 (関西学院大学大学院)

起動動詞 *begin* と *start* が開始した行為の“first part”と“first moment”を表わすという意味的差異は(1)に端的に表わされている(以下、下線は筆者による)。

(1) The beginning/*starting of [the film] “Faces” is very dull

(Wierzbicka 1988: 78)

その一方で、BNC や COCA にはその意味が逆転して使われている例(2), (3)も確認できる。この現象にはどのようなメカニズムが働いているのか。

(2) The doorway slid down and the rock slab suddenly began to move. (COCA)

(3) They started talking for about 20 minutes. (COCA)

さらに、状態動詞との共起可能性を観てみると、*start* より *begin* と、また(4), (5)のように動名詞よりも不定詞と共に用いられる傾向が強い。

(4) I begin to see your point. (Wood 1956: 14)

(5) ?I began understanding how she felt. (Huddleston and Pullum 2002: 1242)

この(i) *begin* (ii) *to* 不定詞 (iii) 状態動詞にみられる強い結束性の要因が何なのかを、(i)~(iii)それぞれの語に共通する意味に着目しながら説明していく。

条件文の帰結節における *be going to* の生起条件と意味機能をめぐって

佐藤健児 (日本大学)

一般に、未来時に言及する条件文の帰結節では、*will* が用いられ、*be going to* は用いられないか、その容認度が低くなるとされる。例えば、Leech (19872: §94) は、次の2つの例を比較して、条件文の帰結節に *be going to* が用いられた (1b) は “unlikely” であると主張している。

(1) a. If you accept that job, you’*ll* never regret it.

b. *If you accept that job, you’*re* never *going to* regret it.

しかし、実際には、次の例に見るように、条件文の帰結節に *be going to* が用いられた例は数多く存在する。

(2) “... I’m telling you, George, if you do not ask Lorraine to that dance, I’m *gonna* regret it for the rest of my life.” (映画 *Back to the Future*)

そもそも、条件文の帰結節に *be going to* が用いられないとされるのはなぜだろうか。また、帰結節に *be going to* が生じた場合、そこにはどのような時制構造や意味機能が存在しているのだろうか。本発表では、条件文の帰結節における *be going*

to について、①be going to の時制構造と②条件節と帰結節の因果関係の2点に着目しながら、その生起条件と意味機能を明らかにしてみたい。

述語削除と法助動詞の陳述緩和的・根源的意味

木村宣美（弘前大学）

述語削除(XP Deletion; X = V, N, A, P)において、法助動詞(Modal)のみが削除されずに残る時、陳述緩和的(epistemic)意味ではなく、根源的(root)意味が好まれることが指摘されている。(浅川・鎌田 1986, 今西・浅野 1990)

(1) John must go to the park and Bill *must*, too. (根源的意味)

法助動詞には陳述緩和的用法と根源的用法があるにもかかわらず、法助動詞のみが削除されずに残る時、何故、根源的意味が好まれるのであろうか。この問題に対して、本発表では、モダリティと命題内容を峻別する階層意味論モデル（中右 1994）の枠組みで、仮説(2a, b)に基づく分析を提案する。

(2) a. 述語削除の認可詞(licensor)は命題内容である。

b. 助動詞の be/have と動詞の be/have がある。(Kaga 1985)

仮説(2a, b)を仮定することで、述語削除と法助動詞の陳述緩和的・根源的意味の相関を、(3)として、まとめることができ、述語削除と法助動詞の用法及び文の容認可能性の違いに説明を与えることができると論じる。

(3) a. ... Modal_[+Epistemic] AUX [XP △] b. ... Modal_[+Root] [XP △]

(Modal は法助動詞を、AUX は be/have/have been の助動詞を、XP は述語を、△は削除要素を表す。)

司会 今野弘章（奈良女子大学）

英語の動詞が形容詞化する場合の否定性と婉曲性
—touchy の意味解釈を中心に—

有光奈美（東洋大学）

Croft (1991, 2001), Dixon (1977, 1991, 2005), Langacker (2002), Ross (1972)等が形容詞の統語的・意味的側面を論じている。creamy 等の「名詞＋接辞」の形容詞が多い中、動詞に-y を加える形は周辺的で、その意味解釈を否定性と婉曲性を手掛かりに論じた研究は未だない。touch の中心的意味が「触る」なら touchy は「触るような」でも良いはずだが、実際は「神経質な、扱いにくい」という否定的価値評価を持つ。「触る」と一見逆にさえ思われる「触ることがためらわれるような」の意である。「touch と touchy」の関係は「sleep と sleepy」とは異なる。つまり「動詞＋y」で望ましくない否定的価値評価を表す形容詞になる動詞があり、背景には「不必要に触られることは不快である」というメタファー(Lakoff and Johnson, 1980)がある。非接触関連表現 showy 等の形容詞群が否定的価値評価であることから、上記のメタファー的視点の上位概念として、コミュニケーションの観点からの婉曲的表現（曖昧性が残る形容詞一語）の意図的選択があると考えられる。

動詞 walk が場所句・経路句を伴わないのはどのような場合なのか

出水孝典（神戸学院大学）

本発表では、動詞 walk が場所句・経路句を伴わないのはどのような場合なのかを検討し、それを動機づけることを試みる。今日の英英辞典では walk が「歩く」を表す場合の語義はあまり細分化されていないが、かつての *OALD*⁴では語義を、(a)歩行行為、(b)移動手段としての歩行行為、(c)気晴らしを目的とした歩行行為の3つに分けている。これらいずれの場合も、場所句・経路句なしで walk が用いられている例が小説に見られる。本発表では、これらの語義の違いとの関連も考慮しながら、実例を分析し、動詞 walk が場所句・経路句を伴わずに用いられるのは、(i)特定の経路も場所も存在せずに、様態の共事象のみからなりマクロ事象を構成しない場合と、(ii)経路が潜在的に存在しマクロ事象を構成するものの表現すると冗長・余剰になる場合であり、場所句・経路句を用いると、(i)の場合 Grice の質の公理の違反に、(ii)の場合 Grice の量ないしは様態の公理の違反になるために、場所句・経路句なしで動詞 walk が用いられるということを主張していく。

英語における名詞のいわゆる「同格」節について

濱松純司（専修大学）

本発表では、(1)のような名詞の同格節と呼ばれる節について考察する。

(1) her claim [that Robert was a doctor]

先行研究では、この種の that 節を名詞の補文と考える立場 (Rosenbaum 1967, Emonds 1985) 及び同格節とする立場 (Stowell 1981) がある。これらに対し、Kruisinga (1932) 及び Huddleston and Pullum (2002) 等は、いわゆる「同格」節において、同格節と補文を区別すべきであると主張する。本発表はこの説に立脚し、名詞の性質、特に項構造の継承の有無に着目し、2種類の that 節を区別すべきである点を論じる。論拠として、(2)のように wh 節が名詞に後続する例を取り上げ、義務的な of の出現の有無により、wh 節において同格節と補文とが明確に区別できる事実を指摘する。

(2) a. the question (of) where the energy came from

b. his recognition (*of) how urgent the situation was

更に、スペイン語において、英語の of に当たる要素 de が que (that)節に先行することを許すデータを検討し、de の義務的出現に関して派生名詞・非派生名詞間に観察される違いにより、英語においても2種類の that 節を区別すべき根拠を提供することを示す。

シンポジウム (5 号館 551) 15.35 – 17.45

テーマ「副詞を巡る諸問題：語法文法、辞書記述、談話、文体」

司会 滝沢直宏（立命館大学）

今回のシンポジウムでは、副詞に焦点をあて、その語法文法的特徴、辞書における記述、談話構成、作家の文体など多様な観点から副詞についての諸問題を考察する。

ly 副詞にみる副詞の多様性：語法・文法・パターン

滝沢直宏（立命館大学）

これまでの副詞研究は、記述文法の枠内での研究（Greenbaum (1969)）、生成文法の枠組みの中での研究（Jackendoff (1972) Ch.3）など多種多様であるが、今回のシンポジウムでは、形容詞に-ly が付加されて派生された ly 副詞に焦点をあて、その詳細な振る舞いの十全な記述研究の端緒としたい。ly 副詞は、臨時語的に作られる場合を除き、研究対象の限定が比較的容易であり、その点で網羅的研究に適しているからである。また、同時にその記述方法についても考える。

文法研究の一環としての副詞研究としてだけではなく、各 ly 副詞の「癖」を出発点にいわばボトムアップ的な記述研究（語法研究）を目指すと共に、研究方法の精緻化を目指す。

具体的には、各 ly 副詞がとるパターンを重視し、パターンを共有する副詞にどのような特徴があるのかという観点から考察したい。例えば、話者の評価を表す "and deservedly so" のようなパターン、ly 副詞と接頭辞との共起傾向、特定のアスペクトに生じやすい ly 副詞などの問題を扱う。またコーパスからの半自動的なコロケーションの抽出方法にも簡単に触れる。

語法研究の要—副詞

—コーパスを活用した辞書編集の立場から—

井上永幸（広島大学）

文法・語法研究において、副詞は要である。一部の研究者が指摘するように副詞は文の中では周辺の要素であり、雑多な要素からなる範疇でもある（cf. Quirk et al. (1985: 50, 729–30), Hoyo (1997: 141–142, 208), etc.）。それであるからこそ習慣的に共起する語彙項目を観察することで、それらの語彙項目の特徴的な振る舞いが見えてくる。限られた時間とスペースの中で、必ずしも十分な先行研究のない項目についても非母語話者を含むユーザーに有用な語法情報を提供する必要がある辞書編集において、副詞は大いに頼りになる存在である。

本発表では、いざ非母語話者が発信の際に適切に使い分けようとする戸惑うことも多い主格補語をとる become と fall を例に、まずは正攻法として fall がどのような主格補語を従えるのかという点を概観したあと、それぞれの動詞と習慣的

に共起する副詞に焦点を当て、それらの振る舞いを分析する。become や fall の項目では、ともすると主格補語の位置に現れる語句だけに注目しがちであるが、副詞に注目することによってそれぞれの動詞の意味特性をよりの確にあらわし、辞書における語法記述がもっとも効率的で客観的に行われるようになることを示す。

副詞（類） actually, really, indeed, in fact の考察

都築雅子（中京大学）

「事実」「本当」という意味の形態素が基となった4つの副詞（類） actually, really, indeed, in fact について考察する。これらの副詞（類）は、文頭・文中・文末と様々な位置で用いられ、認識的スタンス副詞類(epistemic stance adverbials)の用法から、強意副詞類(emphasizers)、間投詞(interjections)の用法、さらに談話レベルで連結機能をもつ連結副詞類(liking adverbials)の用法まで、様々な用法を有することで知られている(Quirk et al. 1985; Biber et al. 1999 他)。Traugott(1995)では、後者2つの副詞類 indeed と in fact が、歴史的に節内副詞から文副詞、談話標識へと用法が拡大していった文法化のプロセスを論じている。

本発表では、これらの副詞類の様々な用法・分布の共通点・相違点を明らかにし、相違点があるとしたら、それが何に起因するのか探っていく。具体的には、コーパスデータ（特に談話的な用法がみられる spoken corpus data を中心に）により、それぞれの副詞（類）の用法と分布について考察する。その上で、認識的スタンス副詞類の用法から、対比機能をもとに actually, in fact は連結副詞類の用法をより発達させ、一方、強調機能をもとに really, indeed は強意副詞類、間投詞の用法をより発達させていると論じる。

小説における副詞研究の多様性

堀 正広（熊本学園大学）

近代小説が始まった18世紀から現在までの小説の言語・文体研究において、副詞に焦点をあてて見ていくと様々な興味深い問題が見えてくる。

(1) 通時的な視点から見ると、時代と共に使用頻度が高くなる副詞と低くなる副詞がある。たとえば、様態副詞の使用頻度は一般的に20世紀に向かうにつれて上昇傾向にある。とくに、slowly, quietly, gently, softly, silently, thoughtfullyなどが増加している。

(2) コロケーションの面から見ると、時代と共に collocability が変化する副詞と変化しない副詞がある。たとえば、heartily は時代と共にコロケーションは変化しているが、fixedly のコロケーションは18世紀から20世紀にかけて一貫している。

(3) 作家毎に見ると、特定の副詞を好む作家や創造的な副詞のコロケーションを好む作家がいる。たとえば、Charles Dickens は新しい副詞を作り（造語）、逸脱した副詞のコロケーションを数多く作り出している。

(4) 作品別に見ると、副詞は人物描写と密接に関わりがある。たとえば、男勝りで気の強い赤毛のアンは、強意副詞の使い方から見ると、実はきわめて女性的な特徴を持った人物であることがわかる。

このような小説における副詞研究の多様性を発表時間が許す限り示していきたい。

英語語法文法学会役員

名誉顧問	八木克正				
会長	内田聖二				
事務局長	五十嵐海理				
会計	住吉 誠				
会計監査委員	大竹芳夫				
運営委員	牛江一裕	内田聖二	大橋 浩	大室剛志	神崎高明
	吉良文孝	澤田茂保	滝沢直宏	中澤和夫	西田光一
	林龍次郎	松村瑞子	安井 泉	吉田幸治	
編集委員	中澤和夫（編集委員長）				
	牛江一裕	大竹芳夫	大室剛志	神崎高明	吉良文孝
	澤田茂保	中山 仁	西田光一	林龍次郎	松村瑞子
	安井 泉	吉田幸治			

発行日	2015 年 9 月 5 日
-----	----------------

編集・発行	英語語法文法学会
-------	----------

代表者	内田 聖二
-----	-------

事務局	〒520-2194
-----	-----------

滋賀県大津市瀬田大江町横谷 1-5

龍谷大学社会学部 五十嵐海理研究室内

TEL: 077-543-7436/FAX:077-543-7615

E-mail: segu.office@gmail.com

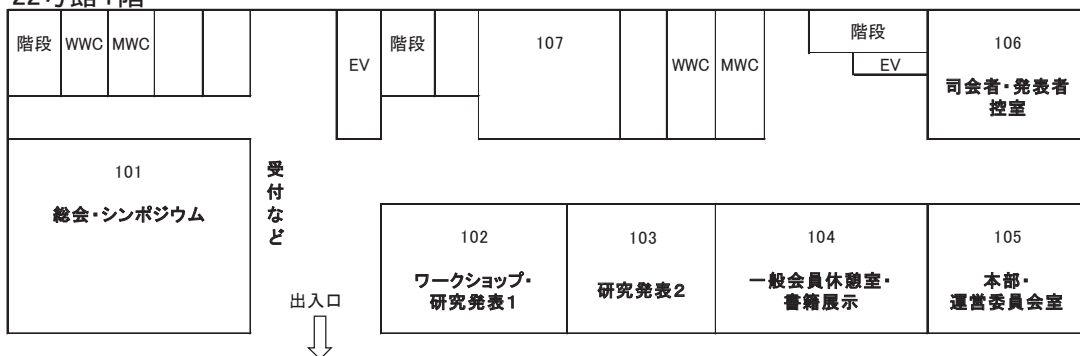
URL: <http://segu.sakura.ne.jp>

振替口座	02260-0-70393 英語語法文法学会
------	------------------------

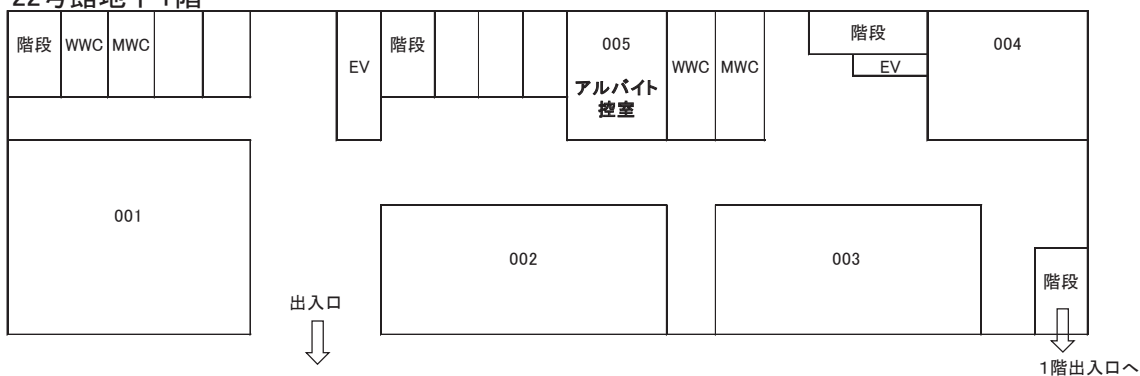
© 英語語法文法学会

会場案内（22号館1階・地下1階・地下2階）

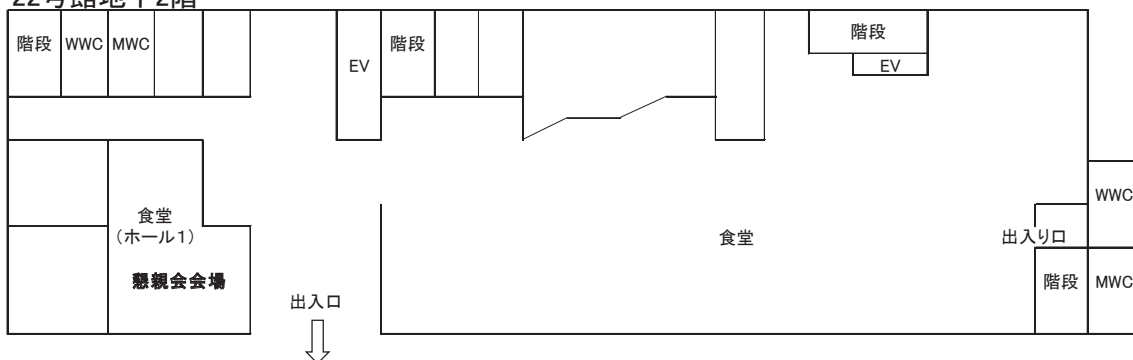
22号館1階



22号館地下1階



22号館地下2階



*全ての会場には階段・エレベーター・廊下で移動できます。

*学会当日の生協の営業時間（変更の場合があります）

店舗名	当日の営業時間
学館コンビニ	10:30～15:00
22号館食堂	11:00～14:00

*この日は瀬田学舎で龍谷祭が開催されるため、これ以外の店舗は終日閉店

龍谷大学深草学舎へのアクセス

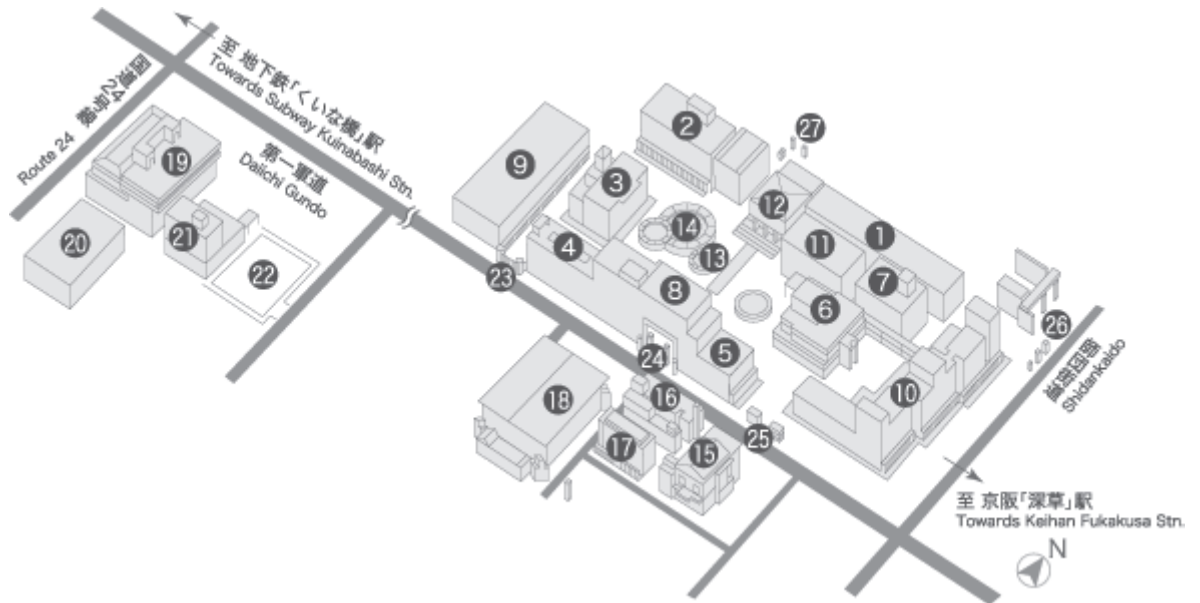
a) 最寄り駅から深草学舎へ



(http://www.ryukoku.ac.jp/about/campus_traffic/traffic/t_fukakusa.html)

- JR 奈良線「稲荷」駅下車、南西へ徒歩約 15 分
- 京阪本線「深草」駅下車、西へ徒歩約 5 分
- 京都市営地下鉄烏丸線「くいな橋」駅下車、東へ徒歩約 10 分

b) 深草学舎内 (⑨ が 22 号館)



(<http://www.ryukoku.ac.jp/fukakusa.html>)